名画の色使いと調和論



北島 耀 KITABATAKE Akira

文化学園大学/名誉教授日本色彩学会/名誉会員

自然美であれ造形美であれ、美がたち顕われるとき、多くは色の効果が伴っている。そのため色彩美が成り立つ条理を巡っては、哲学者や宗教家をはじめ画家や文学者も加わって語り継がれてきた。色の調和に原理はあるのだろうか。名画を色彩調和論と重ねながら読み解いてみよう。

ヴィーナスとハルモニア

調和、すなわちハーモニーは「いくつかの異なる要素が全体としてほどよく整っている姿」と古くから解釈されている。ハーモニーの語源はギリシア神話の女神"ハルモニア"に由来する。彼女は愛と美の女神アフロディテ(ローマ神話ではヴィーナス)と戦いの神アレス(同じくマルス)の間に生まれた不倫の子であり、エロス(同じくキューピッド)が兄弟である。ハルモニアにはこのような異質を取りもつ調和の意味が象徴されている。

ルネサンス色彩画家の一人であるボッティチェリ (1444/5~1510年 イタリア)の大作『ヴィーナスの誕生』

から見ていこう。海の泡から生まれたとされるヴィーナスが西風の神に吹かれ、大きな帆立貝で岸辺に運ばれる場面である。

ヴィーナスの柔肌と全身の描線が耽美的である。ヴィーナスは豊満であるが、なぜか重さが感じられない。迎える季節の女神もローブと共に舞い、祝福の花が宙に浮かぶ。よく見ると、影を描かないことで現実感を薄める秘策が隠されている。それでいて全体に安定感があるのは、単純な三角形で収めた構図にある。そ

して穏やかな色使いが統一感を醸し出している。色調は大きくは暖色系と寒色系に分かれるが、ヴィーナスの 肌色をさりげなく対比色相の青~緑系で囲んで浮かび 上がらせ、赤いローブとの対比で色の効果を盛り立てて

ついでに話をしておこう。このモデルは誰だろうか。 中世以降は全裸女性がタブー視され、また絵画は多人 数の工房で制作されたこともあって、実は、生身のモデ ルをボッティチェリは見ていない。古典を範とする原則 に従って古代彫刻が参考にされていたのである。



図1 ボッティチェリ『ヴィーナスの誕生』1486年頃 テンペラ 172.5×278.5cm ウフィツィ美術館 (イタリア)



図2 レオナルド・ダ・ヴィンチ『モナ・リザ』 1505年頃 油彩 77×53cm ルーブル美術館 (フランス)



図3 中村誠『モナ・リザ100 微笑・NO.17』 1874年 印刷 (4色普通製版の1部に、 ソラリゼーション工程を加えて印刷した) 34.4×25.5cm 刊行 株式会社ウナック・トウキョウ



図4 福田繁雄 『モナ・リザ100 微笑・NO.56 1874年 印刷 (放射状のスクリーンを 使用して製版した) 34.4×25.5cm 刊行 株式会社ウナック・トウキョウ

美の幾何学

調和論の始祖は紀元前6世紀ギリシアの哲学者ピュタゴラスとされる。彼は宇宙には天体の運行で調和音が響き渡ると考え、協和音の構造が単純な数比関係にあることを発見してこれの論拠とした。彼の宇宙論は2000年以上も後のケプラーまで受け継がれ、続くニュートンも音楽との類推によって色彩調和を構想している。

形態における調和美の思弁も古代ギリシアに始まる。 黄金分割はパルテノン神殿建設を指揮したフェイデアスが初めて用いた。白銀比と呼ばれる1:√2も同じ歴史をもち、日本でも大和比と呼ばれて法隆寺等で用いられた。またポリュクレイトスは人体比例の規範(カノン)を規定して八頭身の人体表現が一般化した。ボッティチェリのヴィーナスもこれに準じている。

平面画での美の幾何学には遠近法がある。外界を見る眼と同じ距離感で描写する絵画技法であり、15世紀にイタリアで確立された。ここに"色の遠近法"を加えたのがレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452~1519年 イタリア)で「空気遠近法」と彼は名付けた。近景から遠景になるに従い空気の介在によって青みが増すようにする遠近法である。これを『モナリザ』で解いてみよう。

ほのかな笑みを湛えた表情と豊かな胸元、喪服かと みられる衣服に絶妙な配置の手、モナリザは世界の至 宝の一つであることを誰しも感得する。背景に目を移す と、近景には肌色と同系色の道があり橋があり、ここは 人里らしい。しかし山並みに向かって色調が緑みに移 行し、続く遠景は青みを帯びて見る人をこの世ならぬ幽 玄界に導く。青の背景は人物像を浮き立たせ、同時にイ メージでの対比効果が強調される。レオナルドならでは の巧みさである。

モナリザは古くから模写もパロディも数知れず世に現れた。中でも格別の評価でルーブル美術館から呼ばれて「モナ・リザ100微笑」展が開かれ、パリ美術界を沸かせた快挙がある。デザイナー中村誠・福田繁雄の制作であるが、その一端を紹介しておく。ここには日本の印刷に関わるメカニズムが存分に駆使されている。

視覚の均衡説

文豪ゲーテ(1749~1832年ドイツ)は色彩研究でも大部の著作を残している。その中に「視覚的均衡説」という色彩調和論がある。残像現象は視覚の均衡をとるため、互いに"呼び求め合う色"であると考えた。3組の補色からなる6色の色彩環を創案し、補色配色を推奨している(補色とは混ぜると無彩色になる関係の色相)。美術史では反対色配色を意図的に使った作例が数多く見い出せる。

補色配色の典型例としてフェルメール (1632~1675年 オランダ) の『真珠の耳飾りの少女』を挙げよう。彼の絵の多くは柔らかな光と幸福感に包まれた情景で魅

O16 Civil Engineering Consultant VOL279 April 2018 U279 April 2018



D E F G A B C D

図5 ニュートンの色彩環(1705)。スペクトル色(虹の7色)を混合すると白になることの概念図である。同時に彼は、色の調和が音の調和と同じく振動立て、色彩環に7音階の記号を付した

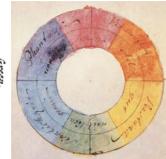


図6 ゲーテの色彩環 (1810)。赤 (深紅)、黄、青の3原色とその残像色が向かい合った6色構成の色彩環。対向する色は互いに視覚的に"呼び求め合う色"である考え、調和する関係として配色に推奨

了されるが、この絵は、振り向きざまの少女が語りかけてくるだけの場面である。配色も肌色がターバンの青を黄色の結びと垂れで挟み、赤は唇だけ、暗い背景の中で襟元の白が絵全体を引き締め、色合いと明暗の対比で組み立ては単純である。しかし明快さこそがこの絵の魅力である。彼はハイライト部分を光の点で表わす独自の

技法を編み出し、光の魔術師と称されている。この絵でも耳飾りの大きい真珠に活かされ、眼にも唇にもさりげない白い点で生気と魅力を生み出している。光の効果を生かす青の使い方が巧みで、彼の青は"フェルメール・ブルー"と呼ばれる。

美学と交差する科学

19世紀の西欧社会は変動が激しく、美術界も同じであった。自由で劇的表現を求める傾向が強まり、色彩が果たす役割も強く自覚されていった。一方で光学・色彩科学の研究進展も急であった。

ここに美学と科学を結ぶ著作が現れる。ゴブラン織工房の化学者シュヴルール (1786~1889年 フランス)の『色の同時対比の法則』(1839年)と『色の定義と命名の方法』図版 (1861年)である。色彩に宿る論理が若い画家たちの感性の奥を突き動かし、後期印象派の画家から「色のバイブル」と呼ばれた。中でもスーラ (1859~1891年フランス)とその弟子シニャックが熱心で、スーラは「色彩は視覚現象である。網膜の上で色を混ぜることができる」というシュヴルールの視覚混

合の原理に啓発されて、点描画法を生み出した。

スーラの代表作『グランド・ジャット島の日曜日の午後』を見てみよう。彼は画面を緻密に計算しながら組み立て、数十点の下描きも用意する努力家であった。だが完成画面には詩情が漂い、理論や努力の跡を感じさせない。休日の行楽地ながらこの絵は物音が聞こえず時も止まったような静謐さに満ちている。

色使いを見よう。横が3mに及ぶ大作であるが、全面が小さな色点で埋め尽くされている。点描画法は、対象物の固有色が明暗と色相で把握され、混色する前の原色を並置して表現される。白は多用するが黒は原則として用いない。混色しないため色に濁りみが無く、日陰にも光が行き渡っているかのような効果が生まれている。彼が光学書からの知識を用いた例が芝生の表現で見られる。人の眼は、明るさによって色味が偏向して見える特性(ベゾルト・ブリュッケ現象)がある。この絵では同じ芝生の緑が、陽の当たる部分は黄みに、影の部分は青みに、と明確に描き分けられている。

この絵は最終回の印象派展に出品されて激しい論議を巻き起こしたが、惜しいことに彼は風邪をこじらせたことから31歳の若さで死に襲われた。



図7 フェルメール『真珠の耳飾りの少女』1665 年頃 油彩 47×40cm マウリッツハイス美術館 (オランダ)

色彩繚乱の20世紀

20世紀の幕開けで西欧美術界に 衝撃が走ったのは、1905年秋のサロン、後に「フォーヴィズム (野獣派)」 と呼ばれる展覧会である。これは色 彩解放のファンファーレであり、色は 物に付随する属性ではなく、人の心を 表わすという意味を込めて原色が氾濫していた。マティス (1869~1954年 フランス) はこの中核メンバーであり、 色彩効果を生涯求め続けて20世紀 最大のカラリストと称された。

『赤い部屋 (赤いハーモニー)』は中期の代表作である。色使いをじっくり見てみよう。人はまず赤の洪水に目を奪われる。画面は奥行感が乏しい平

面パネル状の色面構成である。視線を巡らせると、赤の色面は緑の外景や室内の明色と黒で引き立てられ、唐草模様で躍動感が生まれている。対比効果がある黄色の配置も絶妙である。配色の巧みさは窓枠に現れている。室内の赤からオレンジ・黄色、室外の緑・青へと色相がリレーされている。そして遠くに赤い小屋が現れ、ピリオドの役割をして画面が終息する。

マティスは熟慮の人であった。この絵の描き 始めは緑の部屋であったが青で仕上げられ た。ひとたびコレクターに渡ったが、最後は赤 に塗り替えられたのである。マティスのどの絵 にも色の謎がパズルのように隠されている。

色彩調和とは

色彩学で多才な業績を残したアメリカのジャッドは、世にある色彩調和論を読み通し、 色彩調和の一般原理を4つに集約してみせた。

第一は秩序の原理で、ある規則性を持った色の配列を挙げている。第二は親近性の原理で、人は自然界で親しんでいる色合いを好むとする。第三は共通要素の原理で、色と色の間に何らかの共通する性質がある場合である。第四は明瞭性の原理で、色の組み合わせに適度の差があり、あいまいでないことを挙げている。

「なるほど、これが快い配色のコツかも知れない」と 受け止めながらも、何やらもどかしさが拭い切れない。 もともと色は形態や材質と共にある。しかも美しさの感

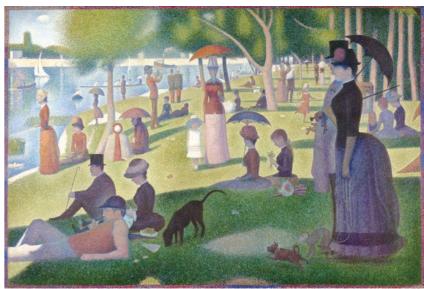


図8 スーラ『グランド・ジャット島の日曜日の午後』1884-1886年 油彩 207.6×308cm シカゴ美術館 (アメリカ)

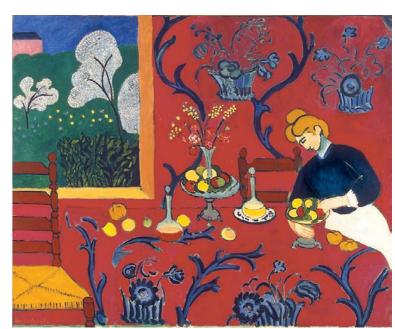


図9 マティス『赤い部屋 (赤いハーモニー)』1908年 油彩 180×220cm エルミタージュ美術館 (ロシア)

得には個人差があり、文化の風土性や時代性も投影される。色彩美を解き明かすことは一筋縄でいきそうにない。

筆者は、調和論とは感動に伴う思考の遊戯であると 考えている。そのため人それぞれの調和論がありうる。 美は、愛と同じく先ず心に響くもの、理詰めの原理は後 追いの理解であろう。美しさに触れる心があり体験があ り、そのとき考える力と感性が増幅し合って創造性が磨 かれていくに違いない。そう考えるのだが、皆様は如何 であろうか。

O18 Civil Engineering Consultant VOL279 April 2018 O19